

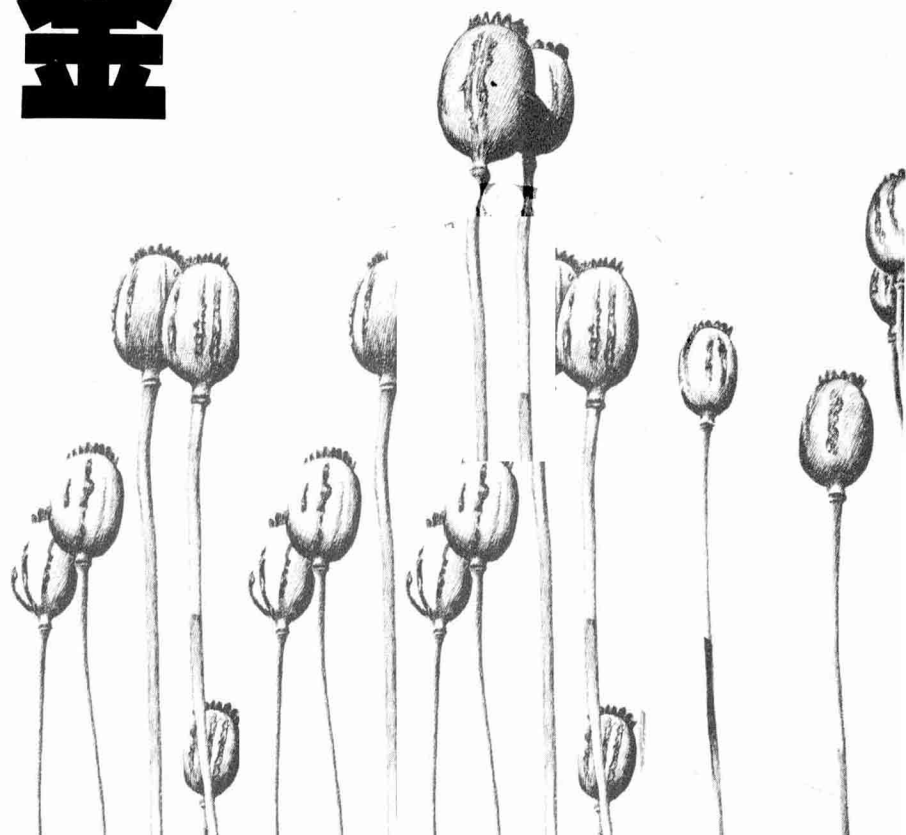
血と黄金

田中光二

角川書店

田中光二

血と黄金



血
と
黄
金



昭和五十四年八月三十日 初版発行

著者 田 中 光 二

発行者 角 川 春 樹

発行所 株式会社 角 川 書 店

東京都千代田区富士見二ノ十三
●一〇一 ●東京一九五二〇八
電話 東京 (三三) 七二一 (大代表)

印刷所 大日本印刷株式会社
製本所 株式会社 鈴木製本所

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

0093-872255-0946(0)



装丁
福田隆義

血と黄金

さりながら金狼や、豹や、山大や、狼、さそり、禿鷹、さては蠍なぞ、われらが悪業の醜惡な動物園に、啼き、わめき、吼え、唸り、のた打ち回る怪物にうちまじり

特別に醜くて、性惡で、不潔な奴が一ついる！

こ奴、大してあばれもしない、大きな叫びも立てないが、そのくせ平気で地球をほろぼし、

欠伸しながら世界を鷄呑みにするくらい平氣の平左。

こ奴、名は「倦怠」——がらにもなく目もとうるませ、水煙管吸いながら、断頭台を夢みてる。

読者よ、君は知っている、この厄介な悪鬼奴を、

——偽善の読者よ、——同類よ、——わが兄弟よ——

ボードレール「読者に」より

——堀口大學訳——

プロローグ

「……分かつているだろうが、二度とここへは来ないよう
にせねばならない」

男は、おだやかにいった。渋いトラディショナルなスリーピース・スーツをきた彼は、デスクの向こうにゆつたりと坐り、彼女はそのデスクに向かい合って、脇かけ椅子に腰を下ろしていた。

部屋に居るのは二人だけで、心をおちつかせるページュを基調に整えられた空間には、かすかなエアコンのひびきが唸っているだけだった。

「私が、このようなことをいうのは、現実に戻って来る人間が多すぎるからだ」

男は続けた。その目は青く澄んでいたが、その口調にはどこか悲しげなひびきがあった。

「じつに残念なことだがね、統計がそれを証明している。

君はまだ若く、体力もある。だからこの治療法にも耐えられた。——もつとも、薬を体から抜くために、楽な方法というものはない。剣の山を一度は越えねばならないのだ。

それを耐えることの苦しさに比べれば、後戻りすることはきわめて楽だ。信じられぬほどに簡単なことだ。

だが、君に警告しておく。第二の機会は、じつはないのだ。もし君が、元の悪習に戻るようなことがあれば、再び立ち直れる機会はないだろう。

君は負け犬になり、生きながら腐って、死んで行く。私はそのことに賭けてもいい。——人間というものは、弱い

ものなのだ」

男の声はむしろ物憂げにさえ聞こえ、それがいつそう、ことばを重いものにしていてた。真実を語る時、人間の声は誰しもそうなるものだ。

「だから、約束してくれたまえ。二度と私に会うことがないように。——この施設から、少なくとも百キロ以内には、近づかないようにだ」

「……そうするつもりですわ」

彼女は答えながら、ゆっくりと立ち上がった。ほっそりした体を、洗いざらしのジーンズ・スカートとタートルネック・スエーターに包んでいる。長い黒髪を、うなじの後で束ねていた。

顔色はまだ蒼く、目の下には隈が残っていたが、黒い瞳は澄んでいた。

「私は、人生のうち三年を、むだにしました。たぶん、もっとも貴重な三年間だった筈です。同じことを、また繰り返すつもりはありません。

——彼のためにも、なくした時間を、取り返さなければなりません」

男は、微笑した。

「その通りだ。それが彼の望みでもあるだろう」

立ち上がって、手を差し伸べた。彼女はその手を握った。わずかに湿っているが、力づよい手だった。

「お世話になりました、先生」

「元気でやりたまえ。輝かしい外の世界が、君を待っている」

彼女は足をとめ、丘の上の建物を振り返った。くたびれかかった三階建ての白い建物。その病棟を中心に、いくつかの付属施設が取り巻いている。

べつだん囲いらしいものは見当たらないが、その必要はなかったのだ。右手には太平洋の海岸をひかえた荒涼たる砂丘が続き、左手にはやはりさむぎむしい、冬枯れの林を交えた湿原がひろがっている。

最寄りの町から、十キロは距っている。その孤独さが、社会から施設を距てる隔壁になっっているのだった。

彼女は、着古したレインコートの襟を立て、カンバス地のスニーカーを持ち上げた。それが彼女の持ち物のすべてだった。今日の退院日に、出迎えを頼める者は誰もいない。十キロの道のりを、長距離バスが通る町まで歩き通すつもりだった。運がよければ、途中でヒノチハイクをすることも出来るだろう。

——決して、ここへは戻っては来ないわ。

彼女は自分にあらためて呟き、吹きすさぶ二月の寒風を押し分けて昂然と歩き始めた。冬のさなかの外界は、所長がいったようには決して輝かしくはなかった。

しかし、ここには自由がある。彼にはついに無縁のものとなった自由だ。——それこそが、人生の最高の宝であることを彼女はさとっていたのだ。

第一部

彼らの血

第一章

一九七九年十二月十日

午後四時五十分 東京——バンコク

電子チャイムが鳴り、アナウンスが機内にひびいた。

「当機は間もなく、バンコク、ドン・ムアン空港に到着いたします。恐れ入りますが、座席を元の位置にお戻しの上、シートベルトをお締め下さい。」

バンコクの天気は晴、気温三十度、湿度六十五パーセントという情報が入っております。」

アナウンスが、次に英語で繰り返されるのを聞きながら、風早真希はスリーピング・マスクを取り、体を起こした。

ボーイング747「ジャンボ」のツーリスト・クラスの、広々とした客室内に、咳払いと身じろぎの気配が充ちていた。香港経由で東京から約八時間、国際便としてそれほど長い搭乗時間でもないが、退屈せずにごすのはむずかしい。二回の食事も堪能した乗客の、倦みかかった気配ははつきりと伝わって来ていた。

傍の、葛木鉄太郎は、シートを倒したまま、まだ眠っている。少年のようにあどけない寝顔で、数億の金を動かしつけている人間だとは到底思えない。だが、Tシャツにジーンズ・バンソ、ハーフブーツという無造作ないでたちの奥には、たいいていの男が鼻白むほどの活力とエネルギーがかくされていた。

その脇をつかんで、揺すり起こした。葛木は、黒瞳が少年のようにくつきりした目をひらき、猫のしなやかさで伸びをした。Tシャツの腹がはだけ、逞ましい腹筋がのぞいた。

「間もなく、着くわ。——よく、寝ていたわね」

真希は微笑した。この男の立居振舞には、とこを取ってもふしぎな肉体的魅力がある。

「ああ。昨夜の寝不足分を、いつべんに取り戻したよ」

葛木はにやりと笑い、シートを立てると、シャツの胸ポケットからモアを一本抜き出した。この細身のシガレロ・タイプ煙草しか、葛木は吸わない。身の回りの品のブランドの選定に関しては、うるさい男である。

真希はおだやかに、金張りのジノボを鳴らそうとした葛木の手を押さえた。

「駄目よ」

天井に近い表示ランプを、目で指した。禁煙の赤ランプが、そこには点いている。葛木は苦笑し、煙草を箱に戻し

た。

シートに頭をもたせかけ、目を閉じた。たつぷり眠ったとはいいながら、まだ眠り足りないらしい。——真希は、かすかに歪んだ微笑を浮かべた。葛木の寝が足りなかった理由を、彼女は知っている。

真希が知っているだけでも、三人の女が今葛木にはいる。ホステスにテレビタレント、そしてもう一人は人妻だ。そのうちの一人と、ねんごろに別れを惜しんで来たにちがいない。三十五歳の葛木はタフだ。一晚中抱き続けるだけの芸当は出来るし、またそれを自慢にしている。——真希自身、それを証言することも可能だった。

真希は、窓に顔を近づけた。ボーイング747は、すでに降下を始めている。ぶあつい灰色の雲塊が急わしく窓の外をよぎり、ふいに視界は明るくなった。

蒼みがかった地平線が茫々とひろがっていた。眼下の地表には、見渡す限り、ライトグリーンの絨氈が敷きつめられていた。——機がさらに高度を下げるにつれ、その平坦な大地を縦横によぎる水路が白く見えて来た。

メナム・デルタ、タイの中央部を占める穀倉地帯。自分の目で見なければ信じられぬほどの広さだった。

機は、轟々とエンジンを唸らせながらなおも高度を下げ、ゆるやかに旋回し始めた。逆光を浴びることになった地表に、水路だけがぼの白くかがやき始めた。おびただしい黒

い点か、その上にちりばめられている。水路を往き来する小舟を示す点だった。

真希は、ひとつの感慨にとらえられていた。これこそがアジアだという感慨。初めてタイ中央平野を目にした日本人は、誰しもその思いにとらえられることだろう。起伏の多い日本の国土から見れば、信じがたいほどの平坦さなのだ。はるかに紫いろに山が霞む地平線に至るまで、大地はひとしなみに押し均らされている。柔順で、豊饒な大地なのだった。

だが、真希の関心は、平野にはない。タイ北部——インドンナの奥地に連なる山岳地帯が、真希と葛木の目的地だった。東は雲南を経て中国大陸へ、北はアノサムを経てチベント高原に至る、まさに重畳たる山の連なり——アヘンケシの花が咲き乱れるその山々に、真希の思いはともすると飛ぼうとしていた。

——ボーイング747は、水田に影を落としながら高度をなおも下げつつある。やがて、水田を一直線につらぬいて走る国道上の、車の姿がはつきり見分けられるようになって来た。

着陸時に常に流される——むろん、乗客の緊張を和らげるためだろう——ソフトミュージックが、エンジンの轟音に交って、機内を充たし始めた。

午後五時十五分 バンコク

「——塩島です。どうもお疲れさまでした」

男がいった。陽に灼けた腕を差し出した。葛木がまずその手を握り、真希も続いて握手を交わした。アメリカでの暮らしが長かったため、真希にはその種のマナーは板についている。

塩島と名乗った男は、中肉中背で度の強いらしいメタルフレームの眼鏡をかけている。半袖シャツにきちんとネクタイを締めている。

だが、その日本語をもし聞かねば、とっさに国籍を見きわめるのは難しかったろう。まさに黒檀に近い肌の色をしていただけからだ。みごとに陽灼けぶりというべきだった。

塩島の正体については、真希はすでに知っていた。税関を指して空港通路を歩いて行く間、旅行代理店の責任者が迎えに来ることを聞かされていたからだ。——税関の入国審査はあつけないほど簡単にすんだ。塩島が、たつぷり係官に鼻薬を嗅がせてあつたにちがいない。

賄賂が公務員をむしばんでいるのは、東南アジアに限ったことではない。真希がかつて仕事で歩いた中南米、あるいは中近東諸国でも、それは幅を利かせ、すでに社会様式の中に組み込まれていた。肩をすくめ、それをやりすどす

ほか、旅行者にとって取るすべはないのだ。

バスポートのチェノクを終え、荷物の到着フロアへ出ると、すぐに塩島がタイ人の部下とともに歩み寄って来たのだった。葛木鉄太郎の顔は、このタイの日本人社会でも売れているらしい。

真希は、首に巻いてあつたスカーフを解いた。エアコンは施してあるようだが、フロアは息苦しいほどに蒸し暑い。冬の東京との温度差は十五度以上あるだろう。タラップから下り立って以来、真希は眩暈に近いものさおぼえていた。

むろん、暑さは覚悟し、半袖のシャツジャケットにスラノクスというあつさりした服装だった。しかし熱帯の蒸し暑さは、そんな配慮を歯牙にもかけぬそぶりだったのだ。「表に、マイクロバスを待たせてあります。ともかくホテルに入って、涼んで頂きましょう。——その前に、荷物だけ確認して下さい」

塩島はいって、先に立って荷物カウンターへ歩き出した。いくぶん猫背の、飄々とした歩きぶりだった。

カウンターの回りは、すでに黒山のひとだかりが出来ていた。「ジャンボ」に乗って来た以上、やむを得ないといえるだろう。

だが、カウンターのベルトの上に最初の荷物が現われるまでに、二十分近く待たされた。決してスピーディとはい

えない能率だった。葛木はモアを二本灰にし、真希は、冷たいシャワーの下に駆け込みたい欲望を必死に抑えつけていた。

ようやく人だかりが緩み始めると、二人は自分のスーツケースを床に下ろした。葛木のスーツケースは大型のサムソナイトで、真希のそれは使いふるしたルイ・ヴィトンである。

塩島は、傍に無表情で立っている小柄なタイ人の部下に、スーツケースを指さし、タイ語で鋭く命令した。二人を促し、振り返りもせずに空港の出口へと歩き出した。

フォルクスワーゲン製のマイクロバスは、空冷エンジンを唸らせ、時速八十キロで国道を疾走している。

真希はいささか人心地を取り戻していた。わずか三人でシートを占領しているために、バスの冷房はよく効いている。深々と息をする余裕が出来たのだ。

「どうだい、初めてのタイの感想は？」

前のシートから、葛木が頭だけを振り返らせて訊ねた。

「暑い。——ただそれだけだわ」

暮れなずむ窓外の景色に目を注ぎながら、真希は答えた。上下四車線ある堂々たる舗装路には、夕方のラノシユらしく車がひしめいている。乗用車、乗り合いトラク、タクシー代りらしい軽三輪、大型バスなどが、文字通り先を争

って走っている。ライトが点滅し、フォーンが喚く。マナーの存在が疑わしい走りっぷりだった。

「でも今では、ぶじにホテルまで辿り着けるかどうか、心配になって来たわ」

「海千山千の海外ルポ・ライターにしては、可愛らしいことをいうじゃないか」

葛木はにやりとした。

「暑さも交通地獄も、すっかり経験済みかと思つたぜ」

「経験はしているわ。でも世の中には、慣れることの出来ないものもあるのよ」

「これくらいで驚いていると、市内に入ったら息が止まりますよ」

ドア際のシートから、塩島が振り返っていった。

「バンコクの交通混雑は、マニラと並んでアジアでは最悪でしょう。でもご心配なく。うちの運転手は慣れています」

荷物を運んだ例のタイ人が、その運転手をつとめている。たしかにきびきびとした、確かなドライビングぶりだった。

葛木は、塩島に頭を向け、語調をあらためた。

「で、どうなんです、その後の具合は？」

「今、国境警備警察筋を、タイの知人に当らせています。」

一両日中に返事が来る筈ですがね。百パーセント確実とは、残念ながら申し上げられません」

塩島は、短く刈り上げた額を手の甲でぬぐった。

「何しろ、こんな仕事は私も初めてですからね。まったく新しい工作ルートを、作らなきゃならない。思うようには動けないんですよ」

「そいつは、分かっている」

葛木の声は、強く冷やかかなものになった。

「だからこそ、バンコクにぐまんとある旅行代理店からおたくを選ぶまで、慎重な調査を重ねたんだ。それだけで、一か月もかかっている。」

資金も、おたくの希望通り、充分に注ぎ込んでいる筈だ。

——今更、手ぶらで帰れといわれても困りますな、塩島さん」

若いスポーツマンのそれと違っていい童顔の葛木の横顔には、張りつめた意志的な線が浮かび出ている。そして巨大ではないといえ、組織の頂点に立つ男の迫力がそこには在った。

「それは、大丈夫。私も、だてにバンコクに十年住んでいるわけじゃありません」

塩島は声を急ぎ込ませた。

「いったん引き受けた仕事は、やりとげるつもりですよ」

「それならば、結構」

葛木は、シートに振り返ると、新しいモアに火を点けた。自分にいい聞かせるように、呟いた。

「こいつは、おれの夢だ。三年間も抱いていた夢なんだからな」

真希は微笑し、再び顔を窓に向けた。葛木の気持は痛いほどに分かる。高揚と不安——その二つに挟まれ、冷静さを欠いているのだ。その理由は、充分知り尽していたが、ここで彼女が口を挟むべき事柄ではなかった。

道はいっそう混雑を増し、赤いテールランプ、ヘノドライトがバスの前後左右にひしめいている。道傍には工場とおぼしい建物や、倉庫が続ぎ、しばしば寺院が見えた。極彩色に塗られ、偉容に充ちた寺だった。鋭く反り返った彩色瓦を持つ屋根が、残照を受けて毒々しいまでに輝いている。人口の九割以上が仏教徒の国であることを納得させる景観だった。

時折、道路に沿って、堀に似た用水路の水面が光った。青ミドリが浮き、ピンクの水蓮の花を浮かべたその水に、裸体の男が腰まで入り、投網を打っていた。——夕餉の菜を取っているのかも知れない。傍のすさまじい交通ラッシュを、全く黙殺している様子だった。

これがアジアだと、真希は思った。矛盾と混沌。おそらくそれは、今後彼女が触れることになるその本質の、ほんの前触れにすぎないだろう。

バスは走り続け、やがて前方に膨大な都市の灯火が盛り上がって来た。——真希は、肩の力を抜き、シートにもた